



# この人と30分

このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

## ガラスの王様

森本貫一（旭硝子相談役）

東京丸の内千代田ビル。その九階、旭ガラス（株）役員室に森本貫一さんを訪ねた。

「まかぬ種ははえぬ、というように、金をかけねば態勢は整わない。熊本も、いま、将来の飛躍の基礎をつくっておかねば……」にこやかに、ゆつたりと話す森本さん。威厳に満ちて、それでいて親しみがあつた。

森本さんは五高・九大を経て、大正四年、旭ガラス入社。以来五十余年、ガラスと共に生き、日本ガラス業界に君臨してきた。昭和四十三年八月、同社の会長を辞任して、一応、第一線を引いているが、いままも同社相談役のほか、三菱油化取締役、三菱セメント顧問、経団連推薦会員、東洋経済クラブ常任理事、薬業協会名誉会員、学士会・九大工学部同窓会の評議員等、要職を兼ね、相変らず多忙な毎日である。県出身在京財界人の大御所、酒豪でも知られる。宇土出身、同市名誉市民。八十四歳。

うことで止ってる。ですから、例えば県が補助金を出す、行動隊をつくって切ってまわるといふことをやっても、これはなんにもならないと思います。

自分たちが植えた桜は、自分たちで病気をなおす。病気をなおすといふ花が咲くんだと。それを市町村から各部落というところまで広げていく。そして身のまわりの病気の桜をみんな切る。ひとりでも切らない人がいるとそこから菌が飛んでいってうつる。伝染病ですから。だから、切らないのは悪いことだというような形の運動をすれば、全県に広がるのではないかと思ひます。病気の枝を切つて二年すると、桜は必ず元気になって、きれいな花が咲くようになるんですから。

### ◆十分な施設をつくる

荒木 えびの高原ができあがってから、宮崎交通の岩切章太郎さんに聞いた話ですが、どんなに枝を折るなどいっても枝を折る。花をとるなどいっていても。だから、そういうことをしないように、こつちが施設を作つてやる。すると、人は施設にうまのつかって、そういうことをやらない。例えば、散策場は散策場として道路をつくり、休息するところにはちゃんとベンチを置く。弁当を食いそうなどころにはチリ籠を置く。そういうふうな施設を作つてやることによつて、それが習慣づけられていくという

ことを言われたわけです。なるほどそうだろうと思ひますし、菊池水源などを守るには非常に必要なことだと思ひます。のべつまくなしに、さわるな、寄るなというのではなくて、ひとつひとつその場所によさわしい掲示をする。施設を作つてやる。というふうなことで、ずいぶん効果を上げていくんじゃないかと思ひますね。

それから、県民総参加というのは、例えば木や花を植えるというふうな行為を伴う積極的な参加と、ゴミを捨てない、汚さないというふうな消極的な参加の両面がありますから、その両面から県民総参加を進めていく必要がありますね。

### ◆花どろぼうは悪いどろぼう

今江 してはいけないということに関して、例えば、花どろぼうはどろぼうじゃないといういい方があります。これを

## 何よりも自分たちのため

藤坂 植木市に行きますと、皆さん花や木を大変大事そうにかかえてお帰りになる。本当は、本質的にそういうものにあこがれていらっしやると思ひます。それで、さつき荒木先生がおっしゃてたように、自分のものは大事にする。それは自然の人情だろうとは思ひますけれど、そういう自分のものと公共のもの

敵罰主義みたいになりますけれども、花どろぼうは一番悪いどろぼうだというふうには自覚的に変えていかないと、あんまり、どろぼうの人権を尊重して、きれいな花だからとたんたんだらうと言つていたのでは、いつまでたつてもとられてしまふ。パトロールうんぬんということになると行政が大変ですけれども、やっぱりそれもしないとも効果が出てこないんじゃないかと思ひます。

荒木 屋敷から道端に枝が出ています。においがいい、花がきれいだから一枝折つたというのと、自動車をもつて山に行つてつじをとるといふのとでは大分違いますかね。

今江 波野のところの滝室坂に、建設省が何千本か植えたつじの苗が、ほとんど全部なくなつてしまいましたね。荒木 そうですか。あんなところでもね。

接点をうまく利用していけば、例えば、道路に面した扉を美しくするとか、扉をとつて花を見せるとか、そういうところから始めたなら皆さんが参加できるし、割合、息長くいくんじゃないかと思ひます。初めから人のためといふのではなかなか……（笑）例えば、観光客のためとかでは、一時的にはできるかもしれない

けれども、なかなかうまくいかないのではないのでしょうか。

今江 そうやってまわりを住みやすくするというのは、観光客のためよりも自分たちのためということですね。

### 藤坂 え、そうです。

今江 それから、熊本市内に大きな緑の木がたくさんある。観光客がきて森の都だと感心するのは、いくらしても構いませんけれども、それが目的じゃなくて、熊本に住む人間が、空気がよくなり、日陰がふえるという意味で住みやすいところをつくっていく。花がいっぱい咲いてるといふのは、よそからくれば一べんしか見ないけれども、自分たちはいつも見ているんだということじゃないかと思ひますね。

### 藤坂 そうですね。

知事 そろそろ時間のようですので、貴重なご意見をいろいろ聞かせていただき、大変ありがとうございました。今後、この運動を進めていきますので、皆さんのご意見を十分反映させていきたいと思ひます。お忙しいところをありがとうございました。

○—お忙しい毎日と思ひますが、熊本にお帰りになることは……。

二、三年に一度ぐらいかな。たまに帰つても、とんぼ帰りだったりで……（笑）  
○—宇土市のご出身ですけれども、熊本を含めまして、ふるさとの思い出などを。

小学校に入学したのが、明治二十七年だった。ちょうど日清戦争の時で、日本軍が威海衛や旅順口を占領すると、日の丸の小旗を持って、先生に引率され、氏神の西岡神社に万歳を唱えに行つたり、宇土出身の軍事探偵・宗方小太郎氏の帰還祝賀会があつたり、山崎練兵場の招魂祭で、蜻蛉（とんぼ）が腕をかかえている造り物などがあつたのを覚えてる。蜻蛉は、蜻蛉洲（あきつしま）日本を意味し、腕は台湾であり、日清戦争後、台湾を領有したのを表わしたものだ。

小学校から高等小学校三年を経て、宇土細川家の私立鶴城学館にはいったが、銀行がつぶれる程の不景気で、一年を終えると廃校になってしまった。当時の小学校は、男女共学で、洋服などは一人も着ていなかったね。皆んな着流しで、何かの式日だけ、一部の者が袴をはく程度だった。その袴も高等小学校で初めてつけていた。

それから、熊本の上崎町にあった私立薬学校（現在の熊大薬学部の前身）に入